

欧州から ニッポンをみる

『トランプ米大統領出現で 世界は大きく変わる』

260

在仏コラムニスト 安部雅延

トランプ米大統領就任以来、世界メディアは、ポジティブな報道をしていない。イスラム教の7カ国の入国制限では、英仏独首脳が批判し、オバマケアの代替案の議会審議入りに失敗し、突然、シリア空軍基地にトマホークを59発も打ち込んだ。予想不可能なトランプ政権の行動に、アメリカ国内のメディアだけでなく、英国放送、BBCや仏日刊紙、ルモンド、英フィナンシャル・タイムズなど世界の有力メディアもトランプ報道では、ネガティブな論調を展開し続けている。

保守、リベラル問わず、トランプ

でないことを見せつけたのが、昨年のアメリカの大統領選挙だった。大統領がツイッターで政策についてつぶやいている状況は過去にはありえないことだ。

それに中国が今のレベルにまで台頭する世界に対して、米新政権は、何をすべきなのか、未だ誰にも見えていない。はつきりしていることは、専門家の知性だけでは政治も外交も動かせなくなっているということだ。

そこで、トランプ政権をもう一度冷静に見ておく必要がある。ある意味で日本人が最も読みにくい大統領とも言えるからだ。理由は、トランプが信仰者だということだ。アメリカには政教分離の原則があっても、大統領は聖書に手を置いて宣誓する。クリントンは当選すれば、その慣習を辞めると宣言していた。

キリスト教が内包している価値観は、一神教の信仰を持たない日本人には分かりづらい。なぜなら、一神教は世界観だからだ。例えば、キリスト教の熱心な信仰者であるペンス副大統領は、進化論は悪魔の思想であり、同性愛者は治療が必要などとして過去に発言している。

神がピューリタンたちをアメリカ

という新天地に導き、理想の王国を築くことを願ったという考えは、アメリカ人の心の底に生き続けている。まっとうなクリスチャンは、自分の中で信仰と政治を完全に分離するのは無理だと考えている。

心の支えでも御利益宗教でもなく、世界観なので、今でも神による天地創造を信じる人は多く、進化論教育を禁止している州もある。バージニア州にある福音派のパトリック・ヘンリー大学ではキリスト教の価値観で学問を教え、共和党議員のスタッフにも多数送り込んでいる。

ペンス氏は、妻だけを愛するために女性だけの会合には絶対に参加しないという。禁欲的なキリスト教徒の価値観は行動も規制する。共和党の大統領候補だったロムニー氏はモルモン教徒だ。彼らは酒煙草、コーヒーなどの嗜好品も飲まない。

トランプ米大統領就任以来、世界メディアは、ネガティブな論調を展開し続けている。

世界の人々にとってのアメリカは、世界最強の経済・軍事大国であると同時に、マクドナルドやコカコーラ、ハリウッド映画に代表される大衆文化とニュース専門ケーブルTVのCNN、アップル、グーグルに代表さ

れるIT巨大企業、そして世界の金融市場を動かすウォールストリートということだろう。

ところが、大量の映画を制作し、世界中の人々を楽しませているハリウッド映画関係者には、反トランプ、親クリントンが多い。さらにCNNは昨年の大統領選で、クリントン・ニュース・ネットワークと揶揄されるほど、クリントン寄りの報道を繰り返し、ワシントンポストやニューヨークタイムズもそれに続いている。トランプ政権が発足し、イスラム教国7カ国の入国制限命令を出したのに対して、全国的な一時差し止め命令を行ったのは、シアトルの連邦裁判所だった。シアトルはグーグル

やマイクロソフトの本社があり、実に多様な人種のエリートが働いている。巨大IT系企業エリートはクリントン支持者が圧倒的に多かった。さらにウォールストリートも同様にトランプを敵視している。ところが、世界が知っているパワフルなアメリカ映画産業やメディア、IT系大企業、金融機関が支持するクリントンは落選し、トランプが当選した。

では、アメリカを代表する企業やメディア、映画産業、金融機関で働く人々の多くが持つ価値観とは何か。それは一言で言えばリベラルということだ。逆にトランプ支持層の多くはグローバル化の落ちこぼれで、格差拡大に嫌悪している人々だ。



一方、トランプ氏の周辺に多い熱心なキリスト教徒やユダヤ教徒は、禁欲的ではなく金儲けに走るのにはなぜか、マックス・ウェーバーは資本主義の出現について面白い分析をしている。それは宗教改革で登場したプロテスタントイデオロギイにおいて、禁欲的に金儲けし、得た金は公的なものに使うことで正当化されるという論理だ。

モルモン教では、旧約聖書に書かれている収入の10分の1を神に捧げる律法を守っている。逆に言えば、収入が多いほど、神に貢献できるということで、一見相反する金儲けと清貧な信仰という2つの活動を結びつけている。彼らの禁欲的金儲け行為は、脇見をせずに金儲けに集中するということだ。

結果、確かにアメリカは巨万の富を手にした。ピューリタンがヨーロッパから流れ着いて長い歳月が流れ、アメリカは大きく変化した。しかし、彼らの血の中に流れる自由、平等、独立心の強さ、正義と公正さの価値観はけっして建前だけとは言えない。トランプ支持派の中には「神がトランプを選んだ」と公言する人も少なくないほどだ。特に信仰者が重視

する正直さをトランプ氏は持っていると考えられている。彼は常に支持者の声を気にかけて行動する。

シリアのアサド政権が国際的タブーとされる化学兵器を使用した事に對して、59発のトマホークを打ち込み、続いて朝鮮半島に向け軍事的圧力を加えるトランプに對して、保守派の論客たちは「アメリカが8年間の夢遊病を終え、本来のアメリカが帰ってきた」と言っている。

トランプは就任当初は、一般市民に向けてミサイルを打ち込むアサド政権に對して、自国で解決する問題だと語っていた。ところが子供がサリンガスで口から泡を吹き、死んでいく姿を見た途端、方針転換した。

その方針転換は、共有できる価値観や利益を守るための国外の戦略的資産の防衛は利益に叶うとするものだ。つまり、アメリカ本来の外交の基本原則に立ち返ったことを意味している。無論、中国やインドなどの台頭でアメリカのプレゼンスも大きく変化している。同時にトランプ氏は過去のどの大統領よりも現実的だ。結果を出すためには方針転換は厭わない。少なくともトランプ出現で、世界は大きく動き出した。